コラム

妻籠宿住民主体による集落保存の活用

―次の半世紀へ―

藤原（ふじはら）　義則（よしのり）
（公財）妻籠を愛する会 理事長

長野県南西部、県境の過疎地にある江戸の雰囲気を醸している妻籠宿、そして、半世紀以上前の明治百年記念事業で復活した中山道の宿場。妻籠宿と中山道の景観保存・修景に10年を費やし、昭和51年に国の重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)に選定された。現在もその志を受け継いで保全活動に励んでいるのが妻籠地区の全戸網羅の住民組織「妻籠を愛する会」である。

妻籠宿は、保存の３原則「売らない・貸さない・こわさない」で全国的に知れ渡り、集落保存の先駆者として現在も多くの人々に注目され、また、そのノウハウを求めて多くの人々が来宿されている。

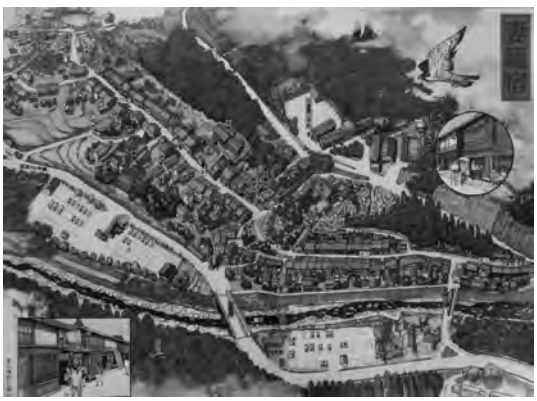


図１　妻籠宿　　安久津和巳画



写真１　江戸情緒あふれる妻籠宿

「こわさない」はあえて漢字の「壊さない」ではなく平仮名で表現しており、それは家屋や石垣を壊すだけでなく、人の心までも「こわさない」の意味が込められている。住民大会で住民憲章を制定し、全国で初めて自らの手で集落を保存するんだと宣言して広く知られている。

統一されたデザイン(景観)、木造家屋の落ち着き、爺さん婆さん、その親の暮らしていた時からの雰囲気が残り、現代的な赤色や、四角い建物、三角の屋根等が混在せず電柱やポスター商品の宣伝類も目に入らない落ち着きを感じられる空気感に多くの人々が引かれるのである。木造の本物志向は今も変化はない。

妻籠を愛する会が景観保存をしている馬籠峠手前の「一石栃立場茶屋（いちこくとちたてばちゃや）」は江戸期の建物であり、持ち主から譲り受け、中山道を行き交う現代の旅人に無料休憩所として開放し、湯茶の接待をして情報収集をしている。コロナ禍以前からインバウンドの多くの人がこの茶屋でお茶を飲みながら旅の情報交換をして、中山道の旅を楽しんでいる。私たちはここを「インターナショナル・ミーティングルーム」と呼んでいる。国際交流の場でもあり昨年度は世界132ヵ国からの人々が訪れた。これも国際水準のおもてなしの成果だと認識している。

昭和45年、日本観光資源保護財団の支援金交付



写真２　インバウンド客で賑わう一石栃立場茶屋



写真３　文化文政風俗絵巻之行列（木曽馬と花嫁）

を受け、保存修理が行われた家屋でもある。２階は養蚕に使用されたと思われる造りである。現在も囲炉裏に火を入れ秋分から春分まで高窓の煙出しから斜光が入り、知る人ぞ知る絶好のカメラアングルとなっている。

私たちは、かつて地域に伝わった季節の行事を可能な限り継承している。正月の門松、旧正月の飾り（百姓の正月飾り、十三月飾り）、節分におけるヒイラギとイワシの骸骨飾り、繭玉飾り、お雛様、こいのぼり・端午の武者飾り、七夕飾り、十五夜の団子とススキの飾り等、一度途絶えてしまうと写真や絵画でしか見られなくなる風物詩が後世に伝えられ今も存在していることで、文化の継承と、日本人の心の安らぎを醸し出している。

集落は木造家屋が連坦し落ち着きのある景観を醸している。異質な構造物は見えない。２×４（ツーバイフォー）の家屋も、三角の屋根やコンクリートの建物も目につかない。個々の建物は日本の木造家屋で、文化財的価値は低いが全体として江戸末期から昭和初期の雰囲気を伝えている。そこに人々が暮らしている動態保存が、その価値を認められて昭和51年に「重伝建」として第１号群の一つに選定された。保存事業以前は囲炉裏の焚き木にしかならないと酷評されていたが、我が国の高度経済成長期に今残さなければ日本のこのような家屋、生活の証は永久に失われると保存に奮闘した人々がいたことも忘れてはならない。日本家屋のベースは木と草の香りである、木造家屋、木の壁、畳、土の道。この景観に魅せられて多くの海外の人々はアクセスの悪さなんてこの景観の素晴らしさに比べれば、全然問題ではないとの評価である。自分の足で馬籠峠の中山道を楽しんで歩いてくるインバウンドの人々は、これまで以上に多くの国から訪れるだろう。正に国際観光地である。これも本物志向で守り続けているからの評価であろうし、今後も先人の知恵と苦労を忘れることなく継承していくことこそが自分たちの務めである。

宿場にマッチしたおもてなしとして、毎年11月23日（勤労感謝の日）に行われる妻籠宿の最大イベント「文化文政風俗絵巻之行列」は昭和43年集落保存の事業始めを記念して行い、昨年で58回を数えた。妻籠宿が一番栄えたといわれる文化文政の頃の恰好をして中山道を歩こうと始めた仮装行列である。大名行列のような派手さはないが宿場景観にマッチしたイベントとして多くの観光客に好評である。宿場役人・侍・百姓・杣人・旅人・瓦版売り・木曽馬に乗った花嫁行列等、晩秋の一日を役者も観光客も宿の景観とのベストコラボをカメラに収めている。

最後に、我が国初めての集落保存が半世紀以上前に前例なくして大成功を収めることができたのは、行政と技術者（学者）と住民がスクラムを組み、あるべき姿を描きながら保存事業を進めたからであろうと理解している。